

南海トラフで地震が起きる傾向が読み取れる。1662年の花折—金剛断層線に沿った地震に対応する敦賀湾—伊勢湾構造線の地震が認められないが、それ以外の地震については、敦賀湾—伊勢湾構造線で大地震が起きると、その後32年（1963—1995）以内に花折—金剛断層線もしくは高槻—六甲—淡路構造線で大地震が発生していることが指摘される。1905年に起きた地震以外は、それから数10年以内に中央構造線に沿って地震が起きている。さらに、花折—金剛断層線もしくは高槻—六甲—淡路構造線で大地震が発生すると、8年（1936—1944）～45年（1662—1707）後に南海トラフで地震が起きてきた。

マイクロプレート・モデルを使って、大地震の発生の時系列を考えると、次のように説明することができる。敦賀湾—伊勢湾構造線を構成する活断層は左横ずれ変位をもつのに対し、花折—金剛断層線では右横ずれ変位が卓越する。1963年越前沖地震（ $M6.9$ ）は敦賀湾—伊勢湾構造線の近くに震央がある。さらに、兵庫県南部地震では高槻—六甲—淡路構造線が右横ずれに変位した。これらの構造線がそれぞれのセンスで活動し、越前沖地震と兵庫県南部地震が発生したと考えると、現在は近畿三角地帯が相対的に南に押し出された状態になっている（図3—12）。この時には、近畿三角地帯と一体である外帯マイクロプレートも南へ移動する。近畿—外帯マイクロプレートが南へ動こうとする時には、四国以西の中央構造線の法線応力が減少し、ここで右横ずれ運動が起こりやすくなる。

私は、中央構造線の右横ずれ運動がアムールプレートの東進に呼応していると考えている。こう考えると、中央構造線はサンアンドレアス断層と同じトランスフォーム断層であることになる。この場合、中央構造線の屈曲部はトランスプレッションの領域となり、中央部が変位したときにはこの領域で地震の発生が予測される。実際に、1596年に起きた2つの歴史地震は、この2つのトランスプレッション領域で発生しているようにみえる。サンアンドレアス断層にはクリープ性の運動成分が確認されており、その一部は常時ずるずると動いている。一方、これまで中央構造線にはクリープ性の動きは確認されていない。クリープ性の動きを持つサンアンドレアス断層と似ているとしたら、中央構造線の中央部もひょっとしたらクリープ性の成分を持っているのかも知れない。

inlandで大地震が発生した後に南海トラフで地震の起きる傾向が認められるた

め、西南日本の内陸大地震の発生原因は、フィリピン海プレートの沈み込みによるものではないと考えられる。このことは、中部日本内帯に認められる横ずれ断層の変位センスが東西圧縮を示唆することとも調和している。東西圧縮の遠因として、アムールプレートの東進と太平洋プレートの東からの圧縮が指摘される。この東西からの圧縮によって、中部マイクロプレートが締めつけられる。この時にブロック境界で左横ずれ変位が発生し、その結果中部マイクロプレート内のそれぞれのブロックが相対的に時計廻りに回転するのであろう。この回転運動に伴って、近畿三角地帯と外帯は南にせり出していることが予想される。そして、このせり出しが歪みの蓄えられた南海トラフの地震のトリガー（引き金）の役割を果たしていると考えられる。したがって、兵庫県南部地震が南海トラフで起きる地震の引き金を引いたと考えておかなければなるまい。

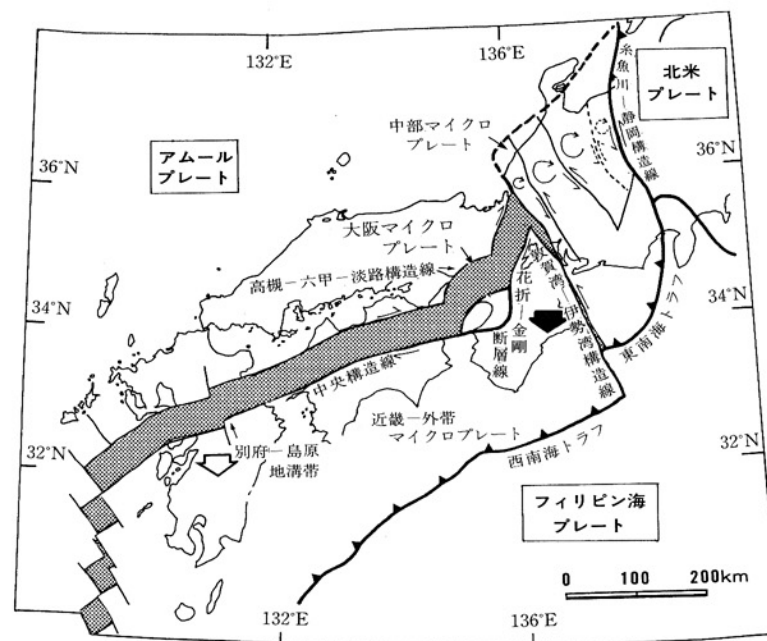


図3—12 兵庫県南部地震後に南に押し出されたと推定される近畿—外帯マイクロプレート